



**ITC 名城クラブ 第 33 期第 9 回例会**

日時： 2016 年 5 月 日(金)10:30~12:30

場所： ルブラ王山

ビジネス

会長 増原久美子

インスピレーション

轟 淑子

プログラム

プログラムリーダー 横井啓子

朗読劇

井上ひさし著

「12 人の手紙」より「プロローグ悪魔」

エデュケーション

林 愛子

出演者

加藤裕子

林 愛子

早川桂古

クラブ会員一同

タイマー

戸松導世

総評

石川恵吾



プログラムリーダー 横井啓子さん



エデュケーション 林愛子さん

朗読劇 出演者のみなさん





はじまりは たかが朗読…と思っていた。

5月の定例会プログラムは朗読劇 手紙形式となった物語を輪読することから始まった。

次から次へ手紙のなかの「物語」を読み進むクラブメンバー。

プログラムリーダー横井啓子さんが仕掛けた「劇中」にメンバーたちは逃れる術もなく物語の中に墜ちていく。

それは前月の例会時に渡された1通の封筒から始まった。

封筒の中には断片的な言葉が少しだけ書かれた手紙が入っていた。

初めもなく終りも無い数行の物語

『あなたのご結婚がきまったのね おめでとう。私は片思いの相手がいるの  
会社のヒトその人の前にでるとふるえてしまう。恋 そう私は彼に恋をしてしまっ  
た。でもその人には奥様がいる・・・でも好きという感情はとめられないの。

六月七日 』

『お元気ですか？ 私は元気 片思いの彼は奥様と別れ私と新しい生活を始める  
の。

十二月二十日』

『苦しくて仕方がないの・・・一月三十日』

(井上ひさし氏による本文ではありません)

読み進むうちに物語が見え隠れしてくる。 次のセリフ(手紙)はようになる？

作家井上ひさしの『十二人の手紙』そのうちの一編

「プロローグ 悪魔」

東京での就職が決まった娘の書いた手紙が並ぶ。

上京してすぐに手紙を書いた相手は、両親、恩師、親友、そして弟。

4通の手紙を読んでいくうちに、少しずつドラマが浮かび上がってくる。  
最初から最後まで、主人公の書いた手紙が並んでいるだけなのに、  
なぜか短編小説になっていく。

プログラムリーダー横井啓子さんに今回のプログラムのことを  
紙面インタビューさせていただいた。

彼女は言う。

「前月例会後、台本の著者と作品名も知らせず台詞だけをお渡しして  
5月例会はぶっつけ本番の朗読劇開始です。

どの様な流れになって行くのかとの心配もよそに、名城クラブの女優、  
男優陣はみごとにひとつの作品を作り上げ、井上ひさし氏真っ青の  
結末ストーリーを考えて下さいました。

他の人の話を良く聞き、限られた情報から良く考え、想像力豊かに  
上手く纏め上げ話すことの出来た内容のプログラムでした。」

用意周到という四字熟語を冠にして

手練手管の迷優達を文字通り井上ひさしの手を借りて手わざでひとひねり  
メンバー全員 小気味よい悪魔になった一瞬であった。

楽しかった。オドロオドロしていた。昼間の会話じゃないね。

はらはらした。名探偵、昼メロ(死語?)

井上ひさしワールドを十二分に堪能できたプログラムであった。

あなたにもご一読をお勧めします。

読後感を是非 聞かせてほしいものである。

編集子

